

『親を生きる』を支える

～児童発達支援センターにおける親支援の実践～



総合福祉センター弘済学園 堀 由美

本日の流れ

- I 「すきっぷ」の療育について
- II ある一人の母親とこれまでの歩みを振りかえる
- III Aさんの言葉から得られた気付き
- IV 気付きを通して、親支援について改めて考える



Ⅰ 「すきっぷ」の療育について

2016年5月開所

単独通園クラス（毎日通園、10名定員の集団療育×2クラス）

- ・担任との信頼関係をベースに、
- ・無理なく十分に楽しめるプログラムを提供し、
- ・子ども同士が互いに意識し合い・学び合い・高め合う力の育みを期待する

2019年5月開設

親子通園クラス（毎日通園を基本に親子で通園、1クラス）

- ・親子間の信頼関係が築けるように、
- ・前向きな気持ちで子育てしていけるように、
- ・親子に焦点を当てて支援する

「すきっぷ」の療育のコアは、

『**構造化支援**』 と 『**心育て**』

- 入所支援の視点～子どもの育ち・発達を、生活丸ごとで見る
↓
通所支援でも生活・能力の一部でなく、子ども丸ごと見る
- 入所支援の強み～子どものライフステージごとの育ちを知る
↓
幼児期は「**人としての育ちの土台**」であることを知る

ここに、**早期療育・早期介入の肝がある** と捉える

『構造化支援』：生活に見通しを保障するための合理的配慮

* 視覚的に指示する

* 視覚的に組織化する

* 視覚的に明確化する

生活が構造化されることでの「安心感」



安心が子どもの「分り方（認知）」を支え、その発達を促す



分り方に応じた「対人関係」を意図して注ぐ



対人関係が深まる過程にも構造化が働き、健やかな関係性の発達へ



この流れに『心育て』がある

視覚的に指示する



視覚的に組織化する



視覚的に明確化する



この三つの視点を生活の中でルーティン化する



安心の下、「見通し」を得る



『いつ、どこで、何を、どのような手順で行うか』を **分かって、主体的に行動する**

『心育て』：「認知・情緒・意欲」の育ち



赤ちゃんは、
自ら学ぶ存在



幼児は、人から
教えられることで
学ぶ存在

幼児期は、他者との
「共有・共感」が欠かせない

大人と一緒に実体験することを通して
「共有・共感」を注ぐ

『からだ』にアプローチする遊びを通して
意図的に働きかける

例) 「すべりだい」であそぶ



- 身体の使い方
- 自分から「モノ」に関わる
- 「はじめ」と「おわり」
- 「ものごと」には因果がある



あそぶための
基礎的なルールを知る

大人とのやり取り抜きに成立しないのが、
幼児期の集団活動

大人が共に遊ぶ中で

認められ・褒められ・励まされ

意欲、自信、根気強さ【心の育ち】がある

「すきっぷ (単独通園クラス)」の親支援



障害があろうともなかろうとも、
我が子の生きようとしている姿
をしっかりと受け止め

その子育てに
じっくりと関わることが大切だ

と気付けるように
親を支援していく

とは言うものの・・・

コロナ禍で、色々なことが変わってきた3年間

親支援で【変えなかったこと】と【変えてきたこと】がある



【変えなかったこと】

登園時、降園時の伝達は簡素化しない

- * 子どもの具体的な様子やエピソードを共有し、
- * その見立てや読み解き、
- * そこから気づかされた子どもの内面を共有していく

【変えてきたこと】

親教室（親向けの学習会）の中身の見直し

- * 障害から子どもを見るのではなく、
- * 我が子の姿や発達から
我が子の障害に気付いていけるように

II ある一人の母親とこれまでの歩みを振りかえる

Aさん（入園3年目の年長児の母親）



- 入園する前のことについて
 - 入園した当初の思いについて
 - 食事や排泄面、親子関係など～辿ってきたプロセスを思い返して
 - 親としての自分について
 - これからの子育ての中で、大事にしていきたいこと
-
- 日々の伝達について
 - 親実習について
 - 親教室について
-
- 3年間を振りかえって思うこと

三つの柱で
2時間弱の聞き取り

※聴き取った内容については、別資料をご覧ください

III Aさんの言葉から得られた気づき

入園前

- 「他の子との違い」「違和感が拭えなかった」
- 「（入園は）障害があると認められてしまうこと」

入園直後

- 「奇跡が起こるかも」「治って普通学級に行けるかも」
- 「子どもを変えてもらえるという思いがあった」

入園後

- 「思っていたよりも、手強い子だったんだ」
- 「奇跡を信じて入園したのに、奇跡は起こらず」

- 「追いついてほしい」「できて欲しい」
- 「どうしてできないの？」

- 「本当に小さなことからちょっとずつ変化」
- （変化に対して）「その歩みにももどかしさを感じていた」

- 「変化のきっかけは、我が子の変化」「でも、認め切れない」
- 「我が子に合う接し方を少しずつ考える」

- 「やってみて、私自身の成功体験があったから」
- 「反応の変化に親としての手ごたえを実感」

Aさんへの支援や後押し



「療育に何のデメリットがあるの？」

日々の伝達で
ありのままの姿の共有

子どもへの発達支援

構造化をベースにしつつ、
安心・認知・関係・身体へのアプローチ
大人からの承認＋主体的な活動→心育ちへと

我が子と担任の
関係の変化

小さな変化
我が子の変化

担任との濃密な
話し合い

聴き取る中で・・・



この言葉は、Aさんが

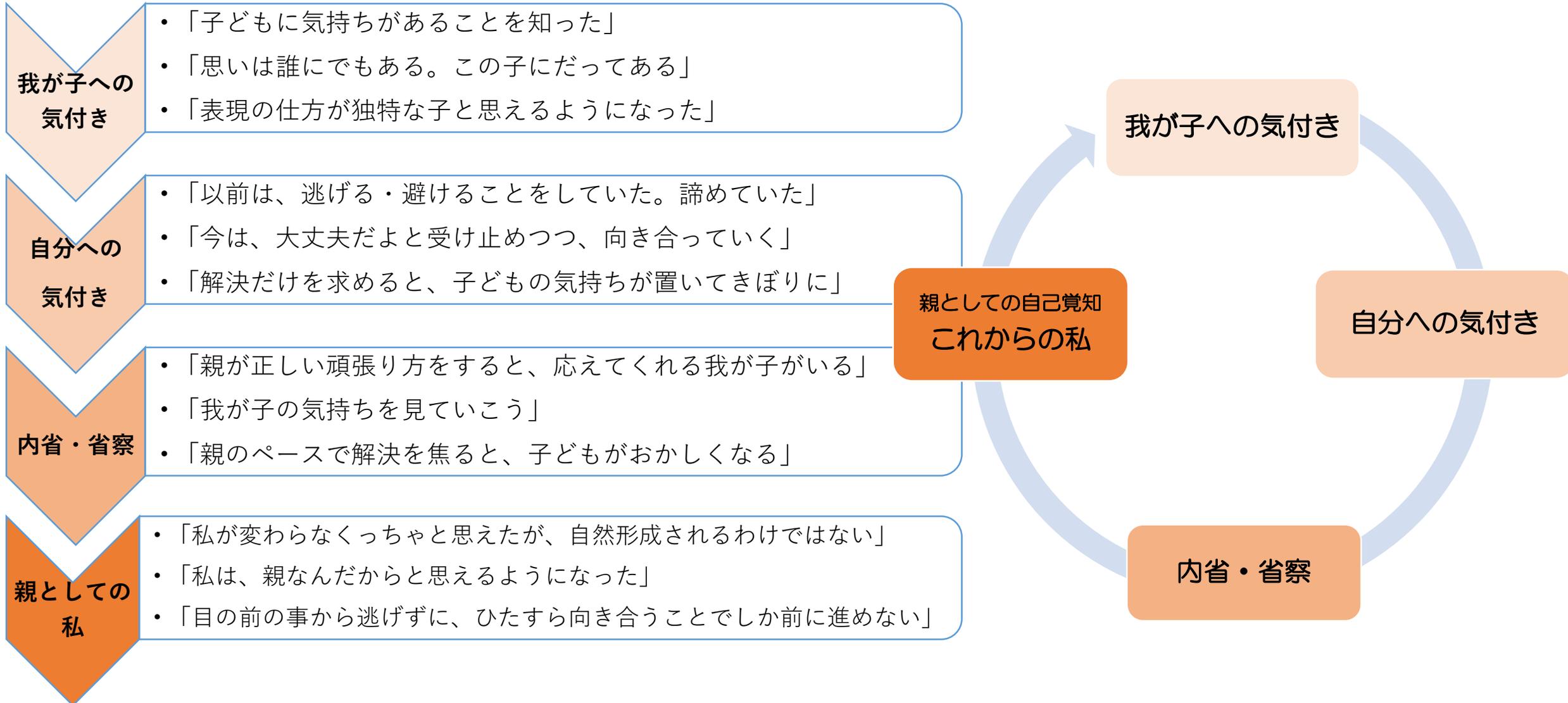
**「我が子の特性（障害）を受け止め、
親として向き合うに至るプロセス」**

になっているように見える

それと同時に、その言葉を語る中で

**Aさん自身が、自分の変化を
俯瞰していったように思える**

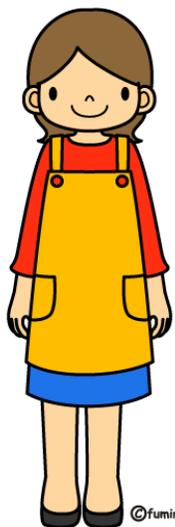
改めて、Aさんの言葉を見ると・・・



ここには『我が子理解へのプロセス』があるように見える

『我が子を受け止め、親として向き合うに至ったプロセス』

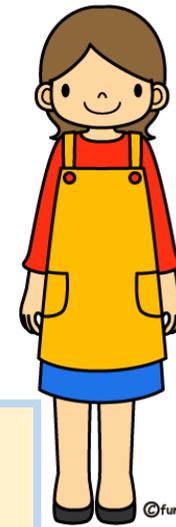
支援や後押しを通して
「相手との対話」があった



親育て

『我が子理解へのプロセス』

「自分との対話」があった



親育ち

「親が、親として、親を生きる」

入り口に立つまでのプロセス

IV 気づきを通して、親支援について改めて考える

* 日々の伝達について



「伝達の中で、相談することで前を向けてきた。
療育は、子どもが5時間過ごすだけの場ではなく、
私が成長するきっかけになったのが伝達だったと思う。
これがなかったら、親として成長できなかった」

本当のことを言って欲しい。
良いことだけでなく、
弱いところや苦手なところも
伝えて欲しい

とも語っているAさん

「ありのまま」を共有することの
難しさを感じている・・・

でも、その共有がないと
前に進めないことも感じている



例) クラス異動～「去年のクラスの時には、できていた」

親にしてみれば・・・『実際にできていた事実を見ている』のだから当然の思いだからこそ・・・『しっかり話し合いを交えていく』ことの必要がある



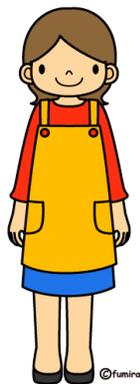
親に子どもと向き合うことを願うからこそ、療育に携わる者として、親と丁寧に向き合おう

でも、誰もが同じようにできるわけではない。だからこそ・・・

- a 子どもの具体的な様子やエピソードを共有しながら、
- b その見立てや読み解き、
- c そこから気づかされた子どもの内面等を共有していくこと

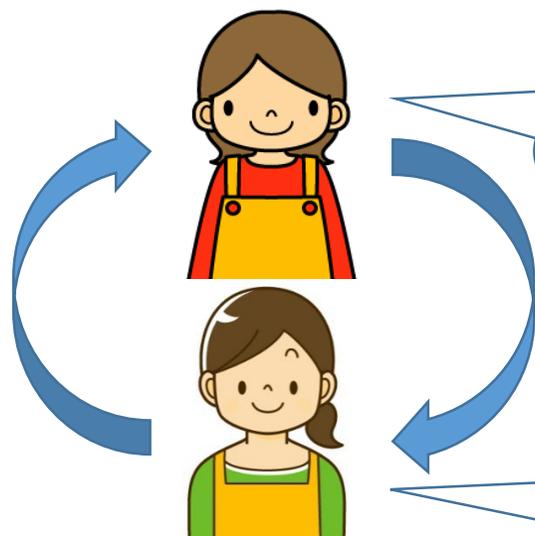
親との共有・共感が「親を生きる」ことを支える「はじめの一步」

* 親実習について



「一年目の実習では、できていないことに目線がいくばかりだった。二年目では、担任がどんな声掛けをしているのか、できていない時や困っている時に、うちの子はどんな表情をしているのか等に気付こうとする自分がいた。

三年目では自分の目が変わったことを実感した。担任の対応にどんな意味があるのか考えて見学するようになった」



他の子たちは〇〇していたけれど、うちの子は△△していましたね

そうですね。でも、□□の声を掛けたら、〇〇の動きが出ていましたね

実習・見学では
同じ方向から
子どもを見る

実際の子どもを見る → 事実の共有



子どもの変化を知る



我が子像の修正へと

そして、ここにも
日々の伝達が横たわっている

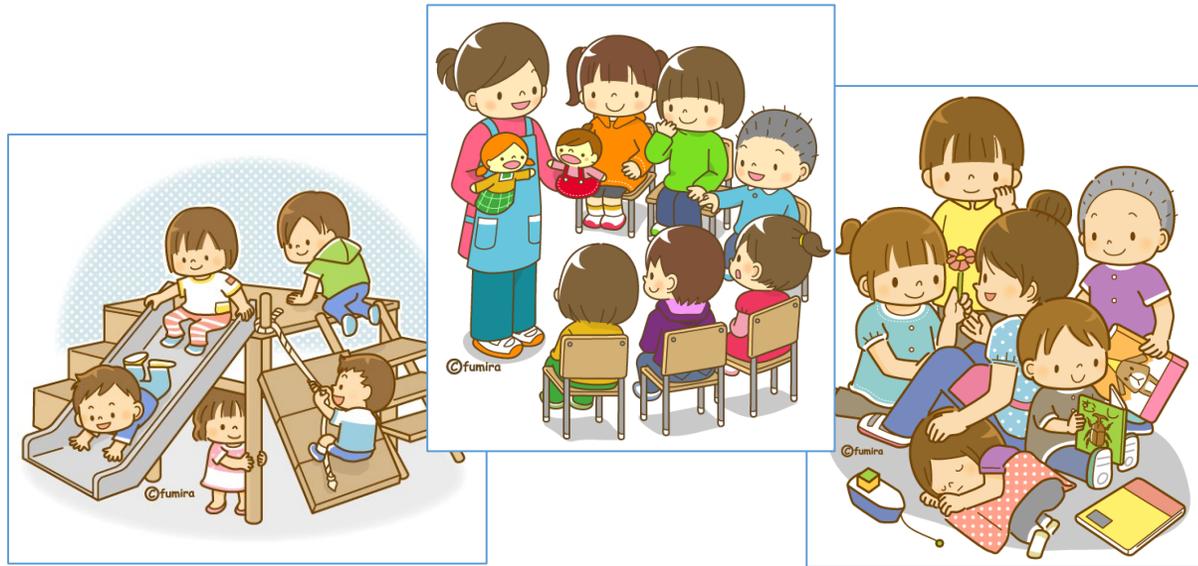
実習や見学の際だけでなく、日常の支援でもよくある？！

「子どもを見る」と「我が子を見る」・・・この違いへの配慮

支援を通して、
毎日多くの子ともと
出会ってきた私



ASDだから、
そういう行動が
見られるのも、
当然かもね



毎日、我が子だけ
を見ている私



療育に携わる私たちは、障害の『カテゴリー』で子どもの行動理解
をすることも多いが・・・

親は、カテゴリーから我が子を見ているのだろうか？
我が子の行動への理解があって初めて、
我が子の障害を理解していく道筋をたどるのではないだろうか。

* 親教室（親向け勉強会）について



「勉強する中で、受け入れられるようになってきた面もある。
障害を受け入れることの一つにもなったのが親教室だった。
病院で「あなたのお子さんは〇〇です」と診断をもらうよりも、
少しずつ知る中で「ああ、うちの子は〇〇なんだ」と
受け止めていくことが出来た」

親教室の見直しについて

目的：障害についての正しい知識の習得

☞ 我が子を客観的に捉えること

これまでの学び方：「障害について」「発達について」など、カテゴリーごとに分けて学ぶ

でも・・・『しっくりこないのは、なぜ？』



☞ 【親は、我が子のことをカテゴリーで見ていない】ことを感じつつも、
カテゴリーごとの学び方をし続けていたからではないのか・・・

そこで、親教室の学び方を見直す

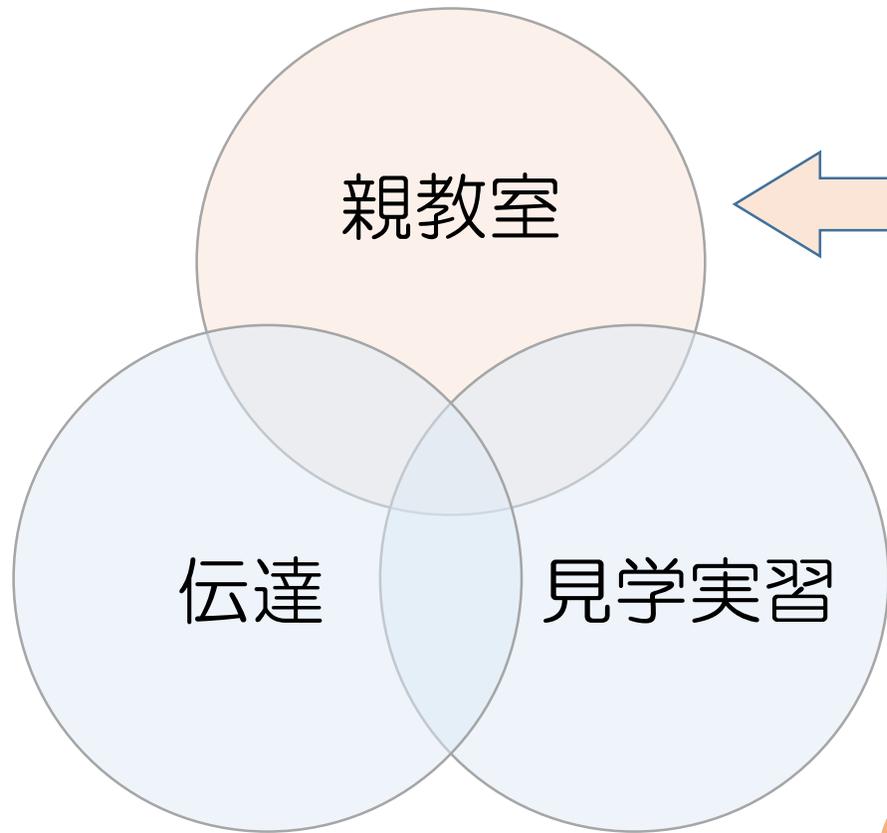
どう見直してきたのか

目的：障害についての正しい知識の習得

☞ 我が子を客観的に捉えること

学び方：子どもの発達についてカテゴリーで括らずに、
『タテの発達、ヨコの発達』の視点をもって見てみる





知識や学びを通して
我が子を俯瞰的にみる働き

担任らとの対話を通して
我が子を直接的にみる働き

親教室の意義に
「自分との対話」があるのなら、
親が『親として生きる』上で
そのことを意図した内容・中身の
模索・吟味をより求めたい



子どもを 知ることの大切さ

